まだ夜が明けきらない早朝から、北白川小（京都市左京区）に、児童や保護者、地域住民らが集まり始める。午前六時半すぎ、七班に分かれた計百二十人は校内のトイレに散っていった。

便器を磨くことを通じて心を鍛えようと、市民ら有志が「京都掃除に学ぶ会」を結成したのが十年前。さらに、同会の活動に賛同する教育関係者が昨年二月に「便きょう会」を立ち上げた。両会は毎月第二土曜日の早朝、京都市内の小学校のトイレで掃除を続け、地域住民らも参加している。

北白川小三年の大和勝宣君（九）は校舎一階の男性職員用トイレを担当した。トイレ掃除の経験はあるが、素手は初めて。「ちょっと気持ち悪い」。右手に持ったサンドメッシュでこわごわ便器を磨き始めたが、左手で直接便器に触ることができないので、力を入れづらいようだ。

後方の個室トイレでは、岩渕信明校長が便器磨きの仕上げ段階。スポンジをつかんだ手をためらいなく便器に突っ込んでいる。「一度高いハードルを超えると、抵抗感がなくなるので不思議です」。ピカピカ光る便器に水を流すと、「これで手を洗えるぐらいですよ」と余裕の表情だ。それを見ていた大和君。「わあ、すごい」と驚きの声を上げ、校長先生の姿をまぶしそうに見つめると、自分の便器に果敢に向かっていった。

スプレー式の強力な洗剤をつけ、少し時間を置いて流すだけでトイレ掃除が終わる時代。ところが、両会の掃除は、こびりついた汚れをていねいにはぎとり、少量の洗剤で磨き、使う水の量も最小限に抑える。「便利さ」とは対極にある。

終了後、小学五年生の女の子は「トイレ掃除は大変。これからはお母さんのお手伝いをしたい」と話し、ある母親は「環境にも良く、この方法が一番汚れが落ちると実感した」と、驚いた様子。大和君も「友だちには気持ち悪いと思われるかもしれんけど、ぼくはすごく気持ち良かった」

素手で便器と向かい合った時間の中で、参加者はそれぞれに新たな発見をしたようだった。

便きょう会幹事長の高向健次・嵯峨小校長は「子どもたちの心の変化だけでなく、教師側も子どもをじっくり見ようという姿勢につながる。取り組みを受け継いでいければ」と話している。

（社会報道部　有賀美砂）

トイレ掃除に取り組む小学生ら（京都市左京区・北白川小）

06.10.17 京都

今月のテーマ

受け継ぐ トイレ掃除

あえて素手 心も磨く

くらしリポート